２０２３年5月２１日　礼拝説教要旨
詩編講解説教１４９「人を輝かせるもの」
詩編１４９：１～9、マタイ５：１３～１６

第１４９編の最大の特徴は、１節、５節、９節に「主の慈しみに生きる人」（ハシディーム）という言葉が繰り返されている点にあります。この言葉は、これまで詩編の説教の中でも何度も取り上げてまいりました「慈しみ」（ヘセド）という言葉から派生した言葉で、それを固有名詞化しているものです。例えばイエス・キリストを信じる人のことを「クリスチャン」というように、神さまの慈しみ（ヘセド）を受けた人を「ハシディーム」と呼んだのです。調べてみますと、歴史的には実際にこのように呼ぶ集団があったと言われます。またこの集団から後のファリサイ派やエッセネ派と呼ばれるグループが形成されたとも言われます。何れにしてもこの「ハシディーム」が１４９編の一つのキーワードになっていることは間違いありません。

わたしたちは「ハシディーム」を何か特定の集団と考える必要はありません。例えば１４９編では２節「シオンの子ら」また４節「御自分の民」とありますように、これは信仰の共同体であるイスラエルを示す表現です。そしてそれは今日における教会、すべての信仰者を指していると捉えることもできます。わたしたちも神さまの慈しみ（ヘセド）を受けています。繰り返し申し上げているように、旧約聖書で「慈しみ」（ヘセド）とは、神さまの変わらない不変の契約のことです。たとえ人間の方が契約を破り、これを裏切るようなことがあっても、それでも神さまは契約を守り続ける。決して契約を反故にするようなことはなさらない。そこに神さまの慈しみがあります。

その慈しみはイエス・キリストによっていよいよ確かなものとなりました。エレミヤ書に「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる」（エレミヤ３１：３１）とあります。このエレミヤの言う「新しい契約」こそ、キリストにおいて成就された救いです。最後の晩餐の時に主は「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」（ルカ２２：２０）と言われました。神さまがアブラハムと結ばれた契約は、過去のものではなく、あるいは有効期限が切れてしまったものでもなく、キリストの十字架とよみがえりによって新しく更新され、わたしたちもまた紛れもなく契約の子として招かれているのです。ヘブライ人への手紙も「イエスはいっそう優れた契約の保証となられた」（７：２２）と述べています。永遠の大祭司であるキリストが、今もわたしたちを神さまの御前にとりなし、罪を赦して神の子としてくださいます。

しかもそれはわたしたちがその契約にふさわしいからではありません。１４９編に「主は御自分の民を喜び、貧しい人を救いの輝きで装われる」（４節）とあります。神さまの御前にわたしたちは貧しく、胸を張って契約の子と言える存在ではありません。それはイスラエルの歴史を見れば明らかでしょう。イスラエルも優れた民族ではなく「どの民よりも貧弱であった」（申命記７：７）のです。エジプトから救い出されても、その救いを喜ぶのではなく、神さまに不平を言い「エジプトにいた時の方がましだった」と言い出す始末です。感謝するどころか、金の子牛を作り、その愛を裏切るものなのです。そのように御前に貧しいわたしたちです。

それでも神さまはこのようなわたしたちを憐れんでくださり、むしろ救いの輝きで装ってくださる。「貧しい人を救いの輝きで装われる」（４節）とあります。この「装われる」という部分

は「飾る」「輝かせる」という意味の言葉です。神さまの救いで飾ってくださる。この表現は、「主イエス・キリストを身にまといなさい」（ローマ１３：１４）、「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている」（ガラテヤ３：２７）を思い起こさせます。そのような救いの衣、義の衣をまとわせ、これで装ってくださることで、わたしたちはなお契約の子であり続けるのです。

それでは中身は変わらないではないかと思われるでしょう。けれども、キリストをまとうことによって、その中身もキリストという衣にふさわしく整えられていくのです。『ハイデルベルク信仰問答』では洗礼について、それはキリストの血と霊によって洗われることだと述べて、さらに次のように説明しています。「わたしたちが次第次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩むためなのです」（問７０）これを教会の言葉で「聖化」と言いますが、洗礼を受け、キリストに結ばれた者は皆そのように存在そのものが輝き出すのです。それを１４９編も示しています。「主の慈しみに生きる人は栄光に輝き、喜び勇み、伏していても喜びの声をあげる」（５節）

「伏していても」は、直訳でも「寝床の上で」という意味です。寝ていても喜びの声をあげるというのはどういうことでしょうか。これは病に伏している状態と理解することもできるでしょう。たとえ病に伏す、病床にあって身動きが取れないような状況でも、人はなお輝きを持つということではないでしょうか。主イエスは「あなたがたの光を人々の前で輝かしなさい」（マタイ５：１６）と教えられます。輝くというのは、単に生き生きと明るく元気に、笑顔で生きるということだけを意味しているのではないと思います。それこそ病に倒れることがある。笑顔になれないこと、ふさぎ込んでしまうこともあります。それでも希望を見失わない。神さまの慈しみ、変わらない救いの約束を信じて生きること。それだけで十分わたしたちは輝いているのです。

天の父よ。あなたの変わらない恵み、慈しみの中にあることを覚えさせてください。苦しいことがたくさんあります。悲しみがあります。行き詰まってしまうことがあります。それでも、あなたは神さまのキリストの救いの衣をまとわせていてくださいます。そのことのゆえに希望を持って歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。